

日蓮大聖人御書全集

きとうきょうおくりじょう

祈禱経送状

新版

1785

フ

1787

きとうきょううおくりじょう

# 祈禱經送狀

文永 10 年 (’73) 1 月 28 日 52 歳 最蓮房

御札の旨、委細承り候い畢わんぬ。兼ねてはまた、  
末法に入つて法華經を持ち候者は三類の強敵を蒙り候  
わんことは、面拝の時、大概申し候い畢わんぬ。仏の金言  
にて候上は、不審を致すべからず候か。しかば則ち、  
日蓮もこの法華經を信じ奉り候いて後は、あるいは頭  
に疵を蒙り、あるいは打たれ、あるいは追われ、あるいは  
頸の座に臨み、あるいは流罪せられ候いしほどに、結句は

しま

おんる

そうちら

この島まで遠流せられ候いぬ。

いかなる重罪の者も現在ばかりこそ罪科せられ候え。

そうちら

日蓮は三世の大難に值い候いぬと存じ候。その故は、

ゆえ

げんざい かいなん あ そうちら ぞん そうちら

現在の大難は今のごとし。過去の難は、当世の諸人等が申す

もう もう

によらいざいせ

ぜんしよう くぎやりとう

だいあくにん じゅうざい

なん もう

ごとくば、「如來在世の善星・俱伽利等の大惡人が重罪の

よじゅう

いま

かこ

とうせい しょにんとう もう

う

余習を失せずして如來の滅後に生まれて、かくのごとく

ぶつぼう

かたき

もう そうちら

つぎ

みらい

なん もう

仏法に敵をなす」と申し候これなり。次に未來の難を申

そうちら

とうせい しょにん ぶるいとうぼう そうちら

よう

つぎ

なん もう

し候わば、當世の諸人の部類等謗じ候わん様は、「この

にちれんぼう

ぞんしよう とき しゅじゅ だいなん

遭

しもん おもむ

とき

おもむ

とき

とき

日蓮房は、存生の時は種々の大難にあい、死門に趣くの時

は自身を自ら食して死ぬる上は、定めて大阿鼻地獄に墮在  
して無辺の苦を受くるらん」と申し候わんずるなり。  
古より已来、世間・出世の罪科の人、貴賤上下、持戒・  
毀戒、凡聖に付けて多く候えども、ただそれは現在ばか  
りにてこそ候に、日蓮は現在は申すに及ばず、過去・未来  
に至るまで三世の大難を蒙り候わんことは、ただひとえ  
に法華経の故にて候なり。日蓮が三世の大難をもつて、  
法華経の三世の御利益を覺しめされ候え。過去久遠劫より  
已來未來永劫まで、妙法蓮華経の三世の御利益尽くすべか  
このかたみらいえいごう

らす 候 なり。日蓮が法華経の方人を少分仕り候だに  
も、かようの大難に遇い候。まして釈尊の世々番々の  
法華経の御方人を思い遣りまいらせ候に、道理申すばか  
りなくこそ候え。されば、勸持品の説相は暫時も廢せず、  
ことさら、ことさら、貴く覚え候。

一、御山籠もりの御志のこと、およそ末法折伏の行  
に背くといえども、病者にて御座しまし候上、天下の  
災・国土の難強盛に候わん時、我が身につみ知られ候わ  
ざらんより外は、いかに申し候とも国主信ぜられまじく

そうら にちれん ろうきよ ここころぎしそうろう

ごぶん おんこと

候えば、日蓮なお籠居の志。まして御分の御事は、

そうちら

せんざく

ろうきよそうちらう

おんやまい

さこそそ候わんずらめ。たとい山谷に籠居候とも、御病も平癒して便宜も吉く候わば、身命を捨てて弘通せしめ給うべし。

一、仰せを蒙り候末法の行者息災延命の祈禱のこと、

別紙に一巻註し進らせ候。毎日一返、闕如無く読誦せら

るべく候。日蓮も信じ始め候いし日より、毎日これら

勘文を誦し候いて、仏天に祈誓し候によりて、種々の

大難に遇うといえども、法華経の功力、釈尊の金言、深重

だいなん

あ

ほけきよう

くりき

しゃくそん

きんげん

じんじゅう

なる故に、今まで相違無く候なり。

それにつけても、法華経の行者は、信心に退転無く、身に詐親無く、一切法華経にその身を任せて金言のごとく修行せば、たしかに後生は申すに及ばず、今生も息災延命にして勝妙の大果報を得、広宣流布の大願をも成就すべきなり。

一、御状に「十七出家の後は、妻子を帶せず、肉を食せず」等云々。權教を信ぜし大謗法の時のことは、いかなる持戒の行人と申し候とも、法華経に背く謗法の罪の故に、

正法の破戒の大俗よりも百千万倍劣り候なり。彼の謗法の比丘は、持戒なりといえども無間に墮つ。正法の大俗は、破戒なりといえども成仏疑いなき故なり。ただし、今  
の御身は念佛等の權教を捨てて正法に帰し給うが故に、  
誠に持戒の中の清淨の聖人なり。もつとも、比丘と成つ  
ては權宗の人すら、なおしかるべし。いわんや正法の  
行人をや。たとい權宗の時の妻子なりとも、かかる大難に  
遇わん時は、振り捨てて正法を弘通すべきのところに、  
地体よりの聖人、もつとも吉し、もつとも吉し。

あいかま

あいかま

きょうこう

ふさいとう

よ

きた

おんり

相構えて相構えて、向後も、夫妻等の寄り来るとも遠離

して、一身に障礙無く、國中の謗法をせめて釈尊の化儀を

たす たてまつ

資け奉るべきものなり。なおなお向後は、この一巻の書

を誦して仏天に祈誓し、御弘通有るべく候。ただし、こ

の書は弘通の志 有らん人にとつてのことなり。この經

の行者なればとて、器用に能わざる者には、左右なくこれ

を授与すべからず候か。あながしこ、あながしこ。恐々

謹言。

きんげん  
じゆよ  
ぎょうじや  
じゆよ  
そうちう  
きよう  
あた  
もの  
そ う  
きよう  
きようきよう

ぶんえいじゅうねんみづのととりしようがつにじゅうはちにち

にちれん かおう

文永十年癸酉正月二十八日

最蓮房御返事

さいれんぼうごへんじ